



中島敦作品研究：戦時下の軌跡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 趙, 楊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002521

本論文は、中島敦の作品を同時代の歴史的文脈に置き精読することで、そのテキストに顕れた中島の時代認識と社会批判的思考を明らかにしたものである。以下、各章の概略を記す。

第一章「朝鮮体験と植民地認識——『虎狩』論」では、植民地における言葉の問題と、虎狩の持つ象徴的意味、宗主国側民衆の植民地認識という面から作品の解読を試みた。

同時代の虎狩事情を調べた結果、かつて正月に行われる朝鮮の両班貴族の特権的な慣習である虎狩が、日韓併合後、日本人の富裕層が行う行事として文化的価値が大きく変容し、新聞に報道されるなど宗主国日本の権威を象徴する一種の記号となっていたことが明らかになった。さらに併合後の土地開発による自然環境の変化によって、虎の餌になる小動物が急速に減少し、それが自然の虎退治になったことも明らかになった。要するに日本統治下の朝鮮で行われる虎狩が朝鮮の伝統的文化の衰退を暗示しているのだ。

日本人少年の「私」が趙大煥に誘われて経験した虎狩は、趙大煥親子が朝鮮の伝統貴族から帝国日本の臣民に転落した軌跡の象徴にほかならないのである。一方、虎狩の場面で趙大煥が勢子を蹴る行為から趙大煥の「豪族の血」を感じ取り、宗主国日本の側に立つ「私」への強がりを見過ごした「私」の趙大煥に対する無理解は、後の趙大煥の失踪の遠因ともなっているのである。十数年後再会した二人の間の理解のすれ違いは、強いられた二重言語生活によって生じた趙大煥の、言葉における混乱を理解できない「私」の反応によく示されている。「虎狩」という作品で、宗主国人と植民地人の間にある理解の断絶は、言葉の次元の問題として描かれているのである。理解の断絶による徹底の拒絶——しかも拒絶する側に朝鮮人の趙大煥を位置づけることで、中島は宗主国側の人間の植民地認識の独善を鋭く指摘したのである。

第二章「記憶装置としての物語——『狐憑』論」では、「狐憑」を精読する作業を通じて、シャクの語りが無文字社会における記録の役割を果たしたことを明らかにするとともに、シャクの死が為政者の長老による歴史・記録の操作の結果にほかならないと結論づけた。

シャクが讒言をいうようになったのは、弟のデックが侵略者のウグリ族との戦いで死んで以来のことである。シャクのこの最初の「讒言」を「鎮魂の

物語」と解釈する論者がいるが、「鎮魂の物語」は同時にウグリ族に襲われたネウリ部落の痛ましい記憶を内蔵していることにこそシヤクの語りの本質があり、その語りの構造を説明する必要がある。つまり、シヤクの「物語」は、一種の「記憶」であり、同時にまた「記録」でもある。後に「周囲の人間社会に材料を採ること」が次第に多くなつたシヤクの「物語」も、実は部落社会に起こる様々なことの記録になりつつある。未開の部落において、「集合的記憶の保持者」で「真実と所有の保証人」として社会に君臨するのは長老であり、「湖上民の最も平凡な一人」であるシヤクに、部族の秘事を「記録」する権利はないはずである。シヤクの死は、「物語る」・「記録する」という越権行為が招いた結果にほかならない。

第三章「政治への懷疑——『文字禍』論」では、「文字の解体」というモチーフに注目し、草稿との比較及び中島が影響を受けたと思われるヴァレリーの文章とを読み合わせることで、言葉によって構築された伝統や制度、すなわち政治が持つ「虚構の力」を暴く中島の意図を追究した。

文字の解体によってその意味が消失するように、あらゆる存在、乃至人間の日常の営み、あらゆる習慣に至るまで、「同じ奇体な分析病のために、全然今迄の意味を失つて」しまうという老博士のこの恐ろしい病気は一体何を意味しているのか。当時の雑誌『文学界』に掲載されたヴァレリーの文章との比較によってその疑問を解明した。

人間の「精神の産物」である「社会とか、法律とか、政治とかの世界」を「神話の世界」と述べるヴァレリーは、それらの世界で安住していくには、「人間の言葉」を信ずることが「絶対に必要なのである」と述べる。不思議な病気による紙の崩壊が「凡ての社会生活」を破壊していくという仮説は、言葉によって構築された伝統や制度が持つ「虚構の力」をよく物語っている。一方、文字の力を誰よりも分かっているはずの老博士は文字の力には服従せず、その「害」を暴くことに終始執着する。「奇体の分析病」によって生じた症状は結局老博士一人の世界の崩壊となって出現し、文字の「害」に「気付いて」いないニネベの人々は相変わらず彼らの世界で安住している。たとえ地震による圧死がなくても、懷疑の深淵に陥った老博士はもはや普通の社会生活ができない生ける屍にすぎないといえる。老博士の偶然の圧死を敢えて文字の霊の復讐のように描いたところに、中島の「組織、慣習、秩序」——すなわち政治への不信が描きこまれているのである。

第四章「〈父殺し〉の物語——『古俗』論」では、原典『春秋左氏伝』と詳細に照合した結果、蒯聵と公子疾、叔孫豹と豎牛との歪んだ父子関係が問題として浮上し、両作品に共通している〈父殺し〉のモチーフが明らかになった。

中島の創作ノートに、「牛人」に描かれた、天井が下降してくる悪夢を思わせる一つの略図が残っている。上下二本の平行する直線の間「一寸」とい

う言葉が書かれ、上の直線の両端にそれぞれ「父親」、「恐怖」という言葉が記されている。更に、上の線と垂直に下向きの「↓」が描かれ、「天井」と表記される。下の線と垂直に上向きの「↑」が描かれ、「政事的」と表記されている。

この略図で注目には値するのは、下降してくる天井を表す上の直線の両端に、それぞれ「父親」と「恐怖」という表示があること。もう一つは、「一寸」しかない空間を下から圧迫しようとする「政事的」なものである。両者の間に潰されそうになるのは、「父親」に対応する「息子」の存在だと思われる。

「父親」に「恐怖」を感じると同時に、「政事的」な何かに畏怖の感情を抱いている息子が、両者の間に圧迫され、潰されそうになる——このような解釈がもし可能であるなら、「牛人」乃至「盈虚」の（父殺し）のモチーフがさらに確実に見えてくる。

一九三七年三月、文部省が編纂した『国体の本義』において、天皇と国民の関係が「義は乃ち君臣、情は父子を兼ね」と述べられている。「支配者は、政治的支配服従の関係に家族間の心情を援用することによって、権力的支配によって生ずる抵抗を緩和しようとするばかりでなく、家族に対する感覚的情緒を国家への忠誠のために動員することによって、現象的には国民の自発性を自らの支柱にすることができた」という石田雄の指摘は、国が喧伝する家族国家観が戦時下の国民動員における働きをよく説明している。

日中戦争が泥沼化している背景の下で、徴兵され戦死した人々の存在は、国家原理と個人体験の背離のなか、屈服するのはあくまでも国民の側で、「父」側の国の原理は、絶対真理として個人の頭上にのしかかっていることをよく物語っている。創作ノートに父親と政事的なものの間にもがく息子の感じた天井が下降してくる恐怖が、『古俗』第二篇の結びのところで瀕死の父親の悪夢に転移する。そのような描写は、中島の意図した（父殺し）の顕現にはかならない。『古俗』は、国が鼓吹した「忠孝一本」へのアイロニーであり、「父」に象徴される国への反逆なのである。

第五章「越境できぬマリヤン——『マリヤン』論」では、語り手の「私」の視線に注目する一方、マリヤンの複雑な内面性に対する分析を行った。マリヤンの『ロティの結婚』に対する不満は何を意味しているのか。日本人の「私」にほのかな恋心を抱きながら、日本人との結婚にためらいを示した彼女の矛盾した態度は何のためなのか。そのような疑問を解明することで、「マリヤン」における植民地の「文明化」問題に対する中島の思考、及び主人公のマリヤンが持つ宗主国意識を否定的に見る中島の姿勢が見てとれる。

第六章「大東亜戦争——『弟子』論」では、「大東亜戦争」が勃発したあと再び古典を素材に書かれた「弟子」を「斗南先生」の加筆部分と読み合わせながら、手帳や書簡の記述も引用して、中島が（東洋精神）について肯定的に語り、戦争に対する思考にも変化が生じたことを論じた。

原典との比較作業から中島の意図した、〈精神〉至上主義者で、「正義派」の子路像を明らかにするとともに、子路が壮烈な最期を以て、〈義〉という君子之道を〈精神〉と〈形〉との両方から完璧に貫徹したという結論に到達した。中島の手帳や書簡、及び同時期に書き加えられた、「斗南先生」における伯父の政治的主張への賛同を表す部分を参照すると、長期化していた日中戦争に対する疑念が「大東亜戦争」の開始によって解消できた中島の安堵の念が感じられる。すなわち、「東亜建設」の美名を掲げながら、東亜同士の中国と戦争を続けてきた日本は、ようやく米英を相手に戦争をはじめたことで、いわゆる「聖戦」の〈精神〉と〈形〉の一致を達成し、かつて疑念を抱いた人々を精神的に解放したわけである。中島は、その時代の知識人の精神を捉えた「一二月八日」の意味をよく理解していたのである。

第七章では「李陵」に見られる人間と歴史の関係に注目し、「大東亜戦争」の進行とともに喧伝されていた世界史における日本の主体性の問題や日中戦争の性質の追認問題を、中島がどの程度客観的に分析しているかを考察した。

李陵は「敗軍の責を償う」ため「單于の首」を狙いながら、「漢に聞える」ことにこだわり、結局実行できずに漢の裏切り者として悶々と余生を匈奴の地で送る運命となった。一方、「人に知られざることを憂へぬ」蘇武は節義を貫き、一九年ぶりに漢に帰還し、しかも、「その跡が今や天下に顕彰される」ことになった。歴史に残された「跡」とは、あくまで完遂できた行為である。そのような意味で、まだ戦争の最終的な行方ははっきりしていない間に盛んに日本の世界史における主体性や「大東亜戦争」の正当性を主張するのは性急の謗りを免れない。中島は「述べて作らぬ」方針を執った司馬遷に託して、自分が生きている時代と真正面から向き合い、社会の現状に対し、ありのままの憂慮の情を表したのである。

以上のように本論文は、中島敦の朝鮮植民地体験、パラオ体験、中国古典に題材をとった代表的作品群について、同時代の様々な史料にもとづき検証し、中島敦の時代への対峙とその姿勢の表現の実態とその意味、さらには同時代に生きる日本のナショナルイデオロギイを背負った一人の国民としての社会認識を明らかにしたものである。